

科学研究費助成事業（基盤研究（S））研究進捗評価

課題番号	25220401	研究期間	平成25年度～平成29年度
研究課題名	木簡など出土文字資料の資源化のための機能的情報集約と知の結集	研究代表者 (所属・職) (平成30年3月現在)	渡辺 晃宏 (国立文化財機構奈良文化財研究所・都城発掘調査部・副部長)

【平成28年度 研究進捗評価結果】

評価	評価基準	
A+	当初目標を超える研究の進展があり、期待以上の成果が見込まれる	
○	A	当初目標に向けて順調に研究が進展しており、期待どおりの成果が見込まれる
	A-	当初目標に向けて概ね順調に研究が進展しており、一定の成果が見込まれるが、一部に遅れ等が認められるため、今後努力が必要である
	B	当初目標に対して研究が遅れており、今後一層の努力が必要である
	C	当初目標より研究が遅れ、研究成果が見込まれないため、研究経費の減額又は研究の中止が適当である

(意見等)

本研究の開始から約3年間で「木簡・くずし字解読システムの開発・公開」という一応の成果を上げ、また台湾との連携ができたことは、研究が計画どおりに進んでいることを示している。

今後は、出土文字資料統合データベースの構築と海外との連携の拡充などにより、当該資料等についての研究を深化させ、積極的に社会還元や活用を試み、さらには東アジア木簡学や資料学の研究に寄与する成果を世界に発信することが望まれる。

なお、データベース構築には種々の困難が予想されるが、この研究はシステムの確立・成果の発信が目的とされているので、史料編纂所などで行なわれている他の史料研究、あるいは台湾だけでなく中国との連携を視野に入れて、これまでの実績にふさわしい成果を上げることを期待する。

【平成30年度 検証結果】

検証結果	当初目標に対し、期待どおりの成果があった。
A	当初の研究目的として列挙されたアノテーションソフトの開発、木簡等の撮影・デジタル化、木簡・くずし字解読システム「MOJIZO」の開発、木簡研究論文データベースの構築・公開、新木簡データベース「木簡庫」の開発・公開などにおいて予定どおりの成果が達成されている。
	形状による検索ソフトの開発、「正倉院文書字典」の一般公開など、本研究終了時までに達成し得なかった事項については、今後もその達成に向けた事業展開が望まれる。また、研究進捗評価で指摘されたように、中国をはじめとする東アジア諸国との連携強化を通じて「東アジア出土文字資料学」が創成されることを期待する。